漢詩鑑賞　令和七年五月　　　　　　　　　　　　　　　玉井幸久

寄李渤　　　　　　　　にす

五渡溪頭躑躅紅　　　　に

嵩陽寺裏講時鐘　　　の

春山處處行應好　　　　きてにかるベし

一月看花到幾峯　　　をてにかる

【通釈】

　起句　今頃は、あなたの棲んでおられる五渡渓のほとりにはが紅くまっ盛

　　　　　りに咲いており、

　承句　嵩陽寺では、説法の時を告げる鐘の音が聞こえていることでしょう。

　転句　春の嵩山の山々は、どこもかも山歩きに好いところばかりでしょう。

　結句　ひと月のあいだに、花を眺め乍らいくつの峰を訪れましたか。

【語釈】

　李渤…人名。唐、洛陽の人。若くして学に励み兄の李涉と共に嵩山のに隠棲し、度々官に召されたが応じなかつた。後に出仕して諫議大夫となった。

　五渡溪…嵩山の山中にある谷川の名。

　　　　　　嵩山には三尖峰があり、中央を峻極・東を太室（一四四0米）・西を少室

　　　　　　（一四0五米）という。

　躑躅…つつじ。

　嵩陽寺…嵩山の南側にある寺。　境内にある古柏は漢の武帝が封じて大将軍と為

　　　　　　　したと伝えられる。

　講時…仏法を講ずる時。

　處處…どこもかも。　到るところ。

　應…きっと……に違いない。

　幾峯…嵩山には三十六峰がある。

【押韻】

　平声　東韻。紅、（起句）

　　　　　冬韻。鐘、峯、（承句、結句）

　　　　　通韻。

【解説】

　張　籍（七六八―八三0？）は中唐の詩人。貞元十五年（七九九）進士及第。

　韓愈門下で孟郊・賈島と親交があり、又王建と共に楽府詩に新機軸を出した。

　若年時、詩の上達を願って杜甫の詩集を焼きその灰に膏蜜を混ぜて飲んだという

　「張籍飲杜詩」の故事がある。

　この詩は、当時嵩山に隠棲していた友人の李渤に贈ったもので、嵩山での生活に

　思いをはせた温い友情と隠者の生活を羨む気持のこもった美しい詩となっていま

　す。起・承・転句で相手の棲む地の模様を美しく想像し、結句ではその中でどの

　ように生活を楽しんでいますかと問う手法は美事です。

　尚張籍の詩は、平成二十四年九月「秋思」を鑑賞しています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上